雲妙間雨夜月六

へ
195
6

へ13
195
6

駿本志

大

特 於 195 6

人のうるはしバ。その地の領主より旅ゝ。罪とるべくハせど。追捕するより憤を散〻〻立ゝる途中。黒駒の驛より宿る。夜中風ふやあり久徴頂よりのらみうを切ど。宿のあゝ。ゆゝ廻のあるうを向ゝるけるば。縁由を村長より告。不相の路狼もあるとバ。家よりめゝ。あとより果るをよつ行よ。彼ふ年を数ゝ。やうやくふ平愈ゝ。物いふも生平み異ゝど。ゝうてゝうの黒駒を農呉ゝ。宿のあゝと村長より送ゝきて久ゝ来るお藤本のゝうゝる松原おゝ。面魂いめゝげある法師二人うち相伴ゝゆゝを笑バ。一人ゝ人ゝ。吾倚底倉の学ゝ名ゝ。寛魂より打扮。生道ゝ不を驚ゝ。その後雷神より後ひゝ。酒肉より飽ゝるゝ。ゝ色後へうゝゝ。あゝたのゝゝ怨地ゝ。受ゝ。舊の山客よりゝぬ。山客ハ山ゝ果ゝゝの常言も。今ゝ

墓あらくも
昔の
夜ものがたり
伊原氏尊者

木賀子舟光神

ちひさくなりしといふに。又一人呵々と笑ひ。それ何をかいふ。山客にはあ
れど。川をわたるべし。山にもあらじ。川にもあれども。それを狼狽廻りて襖
されては悔とも及ばじ。洛へや上るべき。奥へやゆかんといふを愚僧渡
跟きたるを見て。さては先師の冤魂は。狐狸の所為かとおもひしなどの
悪僧どもがなすなりしと。引捕へて責問ば。委細白状なすべけれどかくて
悪魂にのりひつつ。却て毛を吹疵を求やせんと。思ひ止りて見遁し
けり。と一五一十を物がたれば。黒駒の村長は客店のあるじともに又説
き前の言に。光輔主従はいふもさらなり里人等とも物がたりを聞きて。初めて
暁りぬ。さては鈍なりしや。先住の冤魂を済度なさんとあらで。その雷神が豫
てかくも計畧るをしらずして。いと面なしと呟きて。後住の悪みを
なりぬるを詫び。村長と宿の主を労ひて。又いふやうとの寺に先住の
冤魂あまりて生きしといふ風声高く聞えしかば。御弥同宿忽地に逐
電し。師父もゆくへしらずなりにしかば。今全く物のおそろしくて。逃去なひ
ねるとのことなりしも。料簡の新僧なりしく。彼冤魂を鎮め得
させんといふに諾られて。今まで師父をあしさまにのみいひ罵り。彼究僧
を生る信じて。活佛のごとくおもひしこそ悔しけれ。師父が菩提の松原
ゆくえ脱しおひつる悪僧は。それが徒弟なるべく。白雲黒雲と呼ばれつつか
のくんそれもしらで。其のありしとぞ雷神白雲黒雲なるものを審にいひえ
ありし又武音草が横丸が切草のなるに至るまで。おちもなく物語れば住僧
伴くく大に驚き。悪僧各位にも告げずして。漫に遠く出さる事になるか不
思議のなすこと生來つるのさとかりて之と後悔しく。慚愧面にあふれさう
光輔は是彼のいふ所を聞きて嘆息し。和尚。山院の住持として人にもかふ

ぞ。只もろ〳〵俳くろく。人を追留んとしさせハ。おそ〳〵その死度うり。人里人ホが。私ハ雷神をうぢめ〳〵後住と。剰られ。惑され。武章を[illegible]さるの。その罪いと〳〵軽〳〵べ。なるを慮の俄なるよろ〳〵。この件の疑を惹出せり。かれば住侍ハ今ろう艱苦を厭わど。彼此を募化して山院を相續し。里人ホハカを戮〳〵。この寺をろう立且武章が菩提を吊て。前の罪を贖ふべし。このより等閑なるべ。その度ハ許〳〵とえバく〳〵ひ懲ら〳〵。黒駒の村長客店の主ふ。引出物をうびさ。甲斐國へ帰し。〳〵武章をいと惜〳〵その子どもを憐〳〵ひうぶ。近江とのゑ笑て。在京定うるうざれば。彼ホを扶持する由うれを遺憾。武章の子どもの。この地へ来〳〵ホらと〳〵ろうとぞ。かく〳〵光浦ハ。彼草を採〳〵。傷つ[illegible]ふ。その功祢のごとうり〳〵疑ふべうもあらん。

切草とろく。菜園ふろー植。鐘愛いとぶふろ[illegible]

按ずるふ越後名寄巻十六ま云芦切草ハ。諸郡。原野。村里皆生ど。茎一二尺許。葉ハ河原柳ま似〳〵繊く。先圓ー。表ま緗みく。背ま白く青ー。葉ハ四方ま生〳〵相對ま。葉の大の者。長一寸四五分。葉の際ま小枝を生ど。夏の末五出の小黄花を開き。年〳〵宿根ありて生ど。甚繁茂ま。

寺嶋田云云 嘯頼の説

金瘡。折傷。一切無名の悪瘡腫物ま。葉を按。煎煮きの汁出るを付〳〵良ー ○海船齎ー乳〳〵繪の具ま。綿胭脂とふ[illegible]。俗ま生胭脂とふ。繁きう。芦切草の生葉[illegible]〳〵。汁を綿ま浸せる物とふ。我 朝ま〳〵。この草を衝瘡ぜ[illegible]

とい〻本草臙脂の集解。種〻の草花の汁ゆゑ。綿を除てべき
らる法あり。又蘇木の煎汁ゆゑ。胡粉を浸し。綿ゆ塗て生胭脂
贋るものあり。生胭脂ハ血を止るゆ甚效あり。○貝原云。本草
湿艸下の蛇銜草ハ。ちとぎり草ゆ似たり。同書劉寄奴。集解時
珍説畧ほゞ切草ゆ似たり。○大洋子云。按ずるゆ二種あり。本書
よりハ功能ゆ〻一種小草あり。ひめちと切草といゆ。功能甚ゆ〻
選べし。○馬琴云。予が曩ゆ著〻る。俳諧歳時記。芽切草の
條下ゆ〻の説を偏せり。因ゆ今ちゆ緑ゆ。芽切草。もゆ〻ハちゆ人
称ましゆや。近ごろ〻人もちりてい〻。審ゆ説ゆ〻べし

第九套　卯月の舞雲雀

伊原二郎次郎武章が子ども。如。麦次吉ハ。ひねゆ年ゆ。山田信二郎
詮通が庇を憑ゆ。江州観音寺の城中ゆあり。詮通ふゆ〻復ゆ孝
心ゆ感激し。家ゆ養ひゆ〻ゆ子のごゝ慈と手習ひ。物遺せ。又
麦次吉ゆ弓馬剣法ゆ教るゆ武藝その器ゆ堪ゆるとゆ。ゆ〻
ゆ祝もあゆ〻ぬゆ年長ゆる方ゆも。立勝りてぞ入えし。かゝて次の年卯月
上旬。詮通ハある日的弓を射んとゆ〻。妹と麦次吉をゆ〻ゆ戻ゆ出るゆ。
日ゆ日ゆ好ゆ〻ゆ雲雀を畜狎。效ゆ〻ゆ生ゆ〻ゆ高く舞ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ。
雲雀ハ主の手ゆ従ひゆ〻。或ハ上り或ハ下り。進退ゆ〻ゆ任せゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻。終ゆ逃去ゆ〻ゆ〻ゆ。效ゆ〻ゆ入ゆ〻ゆ。詮通ゆ〻ゆ〻ゆ寵愛ゆ。この
日ゆ日ゆ雲雀を效ゆ〻ゆ庭ゆ放て出。的を射果ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ效の門を閉ゆ。ゆ〻ゆ麦次吉ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
雲雀ゆ〻ゆ〻ゆ效を出。蒼天を投ゆ〻ゆ翔場ゆ〻ゆ〻ゆ。雄ゆ〻ゆ

白班の鷹忽然ともくーゐつ。雲雀を遂ふ〳〵矢庭に捉らんとて。逢通估とゑ〳〵大に怒り。あゑて射〳〵ゐん。くらひも果ぬに。矛に吉〳〵刺さる弓矢をきり〳〵と弦固丁と發せばやうさぐ。鷹の中を射〳〵ーゞ。鷹ハ矢を負うぐ〳〵。雲雀を学ゑみと搔爬て逃去〳〵〳〵死〳〵りゝる。そのとき逢通ハ姉矛に吉〳〵もみ走り〳〵つゝ件の鷹とゑるふ既に死〳〵られども倒まてど。雲雀ハいさく爬まて。られもやや死〳〵〳〵〳〵り。逢通憎さも憎しとて。ゆゞて鷹を川紀せば。その容るゝ者あるべきと。生体雪〳〵白く。空さられ。秋裁の道を弱く。楚王の鳳ふ鵬を落ちるみ。ゆ。さ〳〵芳らじとえゆる逸物なり。頂ハ盤を載られどく。羽毛ハ白狼を延るがごく。前ゑむうくを腹のくあり〳〵。羽翼見えど。後ゑ見えゑ見てば抱泉絶上ゑ落ちうと疑る。

前張るとこれハ軒のごゝ〳〵るべく。眼の光ハ明星に似〳〵り。尾魁。矛助。背。待尾。嶋羽。石寸芝川尾只一枚ゑ〳〵て。体ゑ〳〵く馬を遠くし。懸瓜。鳥栖。なり子の指の尖ふ至るうで。善相〳〵べとゐ。逢通これを見〳〵大に驚嘆し。姉矛に吉〳〵ふゆう。この鷹ハこゝ稀〳〵る良禽〳〵。これ今雲雀を失へうゆと惜むゑ遇られど。この良鷹を射殺せるゑ。それゑも傷うて送憾甚し。一時の怒に乗し。くも怒ビーく射さーたるハ。逢通が生涯の悔〳〵りとて。後悔大かさるゝ〳〵ざりけ見ば。ゑハ姉と面をあゝ。射藝熟練の人〳〵せば。殺さでも射〳〵捕べゝ。拙き矢前の〳〵ぐれ當り。鷹の不運〳〵ゝ。ゝ〳〵と回答つ矢を川殺バ。逢通ハ八鷹をうち反〳〵見〳〵大怪。ある者。この鷹の番。この鷹の足に一封の書翰を結びつけ。さて

たえ

信濃の国
伊ホ三文八十四

主あるまるふとそ。母あるん。鮮くるえ。とらくぶ。芳伝吉牝く。彼書翰
をうてうち開を。讀もをろ〳〵ぐ大き驚を。ころこぐ又武章ぐ。今亦の任
書あくひひ〳〵とひひつ涙をかを拭へば。妙ちさ〳〵く。注通ハ。こりー
ひあと呆ヨと惑ひ。そく讀ろ〳〵ゆせよ。とひのよ兄弟うりるく。讀ばは
胸ふぐりて。涙ふ声も隠ロのぐどめあハ太郎五ぐ蛊毒ふく死ーうる
ま。又雷神ぐ為体。その骨相よ至ろを。審よとれを写ー。雷神を
ぬくんとろ〳〵。悞ろ〳〵。嫂蓮紫を切殺ヨ一五一十。太郎五ぐ日本殖愛
の寥る。雪の山よ書を托ーく。寂期よ一言を告る説を書写ー。怨敵
雷神を撃漏らーて送恨甚ーとひ〳〵。悞ろ〳〵嫂を殺ヨ罪とひふせん。
ちりてみづ〳〵。領主よ罪を訴て刑を受るめ。ぬろりの子ーも又ぐ志
を絶ぐ悪僧雷神ぐひくへをらぐ。宿恨をとぐ晴るせうと。讀ぬ果ぐ

ちりり落る涙ハ泉の涌ぐ。声を惜ぐ伝よ。注通ハ。ひと理な
ぬられを慰ろくひりるる。花鳥ろありて。書を百里の遠ひ
ぬ。ぐれも送感ありあて。ちりあんど。物よ定数ありて。ぬる天よ係ると
ひぶ。武章ぐ横弟ひさうる。ぬ惜ぐもろ〳〵ぐ。とろい行す
ぬ定業ひとひ。婦ぬ。父母の怒を雪んらて。ぬよ追福ぬ〳〵め
とろ〳〵言語を喝ーろく練ーうぶ。嫂。夫次吉ハ。いろ〳〵ひ伝く。ひろ
ともよいのうろぶ同胞。殿の代庶よりろく。路次ぬも呻吟ず。親
とも師ともひまる。そのりんん慈をのろ伝ぬハ毒蛊の湖水とひ
とも尼ぬべ〳〵ぐ。ちろよ過世ぬ〳〵て。父母も非命よ世を去る刺
悦人の往ろをあ〳〵ぐ。加之。ぶ伯父の夫押ろ〳〵尊の弟ぐと

父が使をいさぢ小ともちぐぢと射殺せり。恩ハ鳥もしたうあ
を人さうく豈孝行のこころあるにんや。願くハ今より身の暇とし
まうそ底倉へ赴れ。面めくり父が喪ふる迹をもうえく。嚴朝のやうを
も尋問。雷神が往方を索めぐりひべ〜しあるの許〜あひれこうさ
に綜〜同胞が今ハ居。父の像見の遺書よむあ〜紀意を抱紀傳紬
の雨ぬが槌喉の槌ゐ〜ゐくよ三〜の枝の枝よ〜ゐれ〜歎せり。絳通
炎し。眼を点び〜〜れ。兄弟の哀傷さるとゐれども。はやゐこたちく。
底倉へ到まびとそ仇人ゐぐう彼処よあ〜ゐんや。他ハ嫂を殺ちゐあ
まゐうゐんど。縁故をちうぐる里人ホよいいもんハ父母の羞ゐり。若ゐハ
若の報ゐり。悪ゐハ悪の報ゐり。ゐ志後ちぐ。天運循環して。居つ雷神が
在処もちるべ。曾我殿原が若ゐ十八年ゐうく。ゐ宿志を果せりそれ
さく北條とゐよ後盾ゐくハ。剛猛祐経を狙撃をようぢ。況て世
ホらの池を離迯。雅よ便ゐく望を遂んとゐ。ゐるも絳通ホ
うち任せよとのひ諭〜く。叮嚀ホ教訓〜。頻よ彼ゐるが人ゐも勝
ゐを嘆賞〜く已ど。終よ人倫の礼をゐて。城外の曠所ホ葬ゐホ。
奴隷ホ。ゐるを埒ゐとて。土を起ちゐよ。土中ちり観世音の小像を得ゐう
ゐれゐん妙。ゐ吉ゲ亡父母の二世の値遇ゐありとて。ゐぐちゐのよ。
さ〜ゐある堂を造ゐと。彼観世音を安置〜武泰。武章ゐ位ゐ
牌を。菩薩のゐん前よ居。更よ一竿石を建て。美鷹塚と銘
けさく。且亡者のゐよ。追薦の佛事を徹ゐちしうび。妙ゐ法ホ
ちく絳通の高恩を感謝〜つ。底倉へ赴くゐりとゐ
ゐ。毎日小波観音堂へ詣ゐく。父母。伯父母。生の山が菩提を吊ゐ

人雷神が往方をたづねあくまで縛る外花さかりかりめくて注通ハ
主君氏頼より妙麦次吉がつゞ武章がつゞ雪の山が信義雷神が
さべくこの件のゆを審よゆメえあげ曩小物なんが牛を騙とり
るゆ雷神といふ悪僧が不なるまく二帝次帝武章ハたゞ一つく
これを買ひ〳〵より遂よ連累されるる縁故をたゞしあし妙麦次吉が主
孝のね俸をゆえあげ〳〵ゆ氏頼ふく賞矣〳〵ゆ二帝次帝が横死彼
蕩のゆいと不便なり。洩妙麦次吉とゆ〳〵を補て悪僧が往方を
索。怒を報せんと仰るゝど。注通らけあり て。ゆよ退ぬゆて主命
の慈を妙と麦次吉より説たし。麦次吉が武藝今一両年より煉ぬ
れるゝともよ。術岡を編歴〳〵。宿望を果さんとべ〳〵。ゆ〳〵四〳〵の
恩澤あれば〳〵ゆ〳〵ぬも化よりゆ〳〵ゆよ。妙も第も感候を

拭あくどいふ〳〵志を一所〳〵つ。麦次吉ふゆ〳〵武藝よゆを委ね且
同胞日夜己を責ふ。ふ〳〵注通より仕〳〵ゆ妙婢もふゆがふよ義て。
その滅亡を稱嘆ざるいなりけゝ。

第十套　鏡山の朝雲布

さても兇僧雷神ハ底人君ゆ〳〵武章が一力を脱出その疾とるゆも
とりあくど。彼山を遂電〳〵ゆ往方ハ定めねど。是首彼首と互潘
びゆ死〳〵〳〵。近ゆ〳〵。境山の麓を過るよ。此処ハ故郷へも往遠〳〵
ねゆ〳〵りふる人よ遂ゆ〳〵するとて。昔熟もてる山路ふれゆ〳〵もゆふれね
間道を往〳〵。守山のふ〳〵続て出んとて。頃〳〵も五月四日のゆ〳〵ゆ
天餓頃よ結陰雨降ふ〳〵。盆灸覆すゆ〳〵。山路ふ出ゆ〳〵ゆ
ゆふゆふ家もゆ〳〵。樹のゆよ立在ゆ。晴ふ〳〵を俟よ雷の鳴といと

鳴神法師

烈しく電眼を射て瞻望すれば。ちら〳〵ありて雷声あるやうに。雲霧て
夕陽山の挾より斜なり。日うれとも。ひとつぶ難儀するべーとうひて。濡らす
衣を絞もあへず。樹のかを走りぬく。ぬくといそぐ五六町よりほど。
とつうれば。ゆりたる楠の間より挾をて。苦〳〵げよ嘯くものあり。
いと怪くて近くるまゝよりとぶ。又見ればどろ〳〵と獣あり。雷霆
うれをとうえ。ゆうえうとゆうえうとゆう。世よりの雷獣なるべ。推量するかの
の儁よりの横の上より嚴〳〵と勢よ乗〳〵。ゆる大木を折裂たるか。
終よ木の裂目より挾をて。雲より乗るゆを以ざるゆとあば。世のの末を
熟ゆる雷公もあるものゆゆ。さらぶ助ゆるをるぞといひちと。陽杖を
突入をゆうぶ〳〵とゆ〳〵〳〵〳〵撫出〳〵れば。その獣忽地よ見えぬ。さて
逃げの疾れ奴ありとうち笑ひつゝ。又ゆくを三町よりと。不動尚あ

たりをくい探をゆ虚気〳〵。日のくれぬ間よりの山路ぶ〳〵とと
ひ〳〵〳〵ゆれば。晴間を俟る樹のかよ。既陀袋を忘れゆ。彼此
ゆ。蓮ゆが像見ゆる。境をゆゆるものを。山路ゆんがいをぶ〳〵とゆ
ゆん〳〵ゆ〳〳〳〳ゆ。とひとりぶち。ずとゆとゆ〳〳さんとゆるゆ。日い忽地よ
没果ゆ。いと暗ゆりつゆゆ怪〳〵ゆるゆ。そぶ暮ゆゆゆ祇もゆるべう
思ひつゆゆ。ゆ〳〳ゆ既陀袋を取らんゆも便ゆ。今宵ゆ守山よ宿
ゆりて。翌の朝ぶゆよゆ〳〳び。ゆゆ山ゆよゆ〳〳ゆ。それを素ゆゆも逆
らじと。寄思〳〳ゆ。遂よ守山を投ゆいそぶよゆれど。野干玉の烏
夜ゆれゆ。路ゆや迷ひゆん。ゆけとゆも〳〳里へ出ぶ。ゆゆ頻よ焦燥〳〳
右ゆ左ゆ。ゆひ〳〳ゆ〳〳ゆ折〳〳も。逢前面よ。火光ちら〳〳とゆんら〳〳ゆ
さゆい彼処よ人ゆ住ゆ。と喜〳〳くと。ゆの火を目ゆゆ。ゆ〳〳ゆ

とゝろよりもれくゝえれば。果〳〵く谷陰より。一軒の草舎あり〻り。やがゝ
諸折戸をほとゝと敲よ。内より女の声〳〵く雄と向雷神答ことれ
い山路より迷ひたる行僧なり。旅くゝこの夜を明さゝめてといふ彼婦
とれをやゝく立出荒〳〵る折戸を開つゝいふやう。この処へ宿すか
れ。あらまゝねど。鬻ゝるべき夫なりまれ悟〳〵たるよ。れ身よ救れ行りし
ゝとこの再生の恩あるべし。穴鏑より宿〳〵進らとべ〳〵。たゝりとも鬻を
べれ飯炊もすり。露宿ぜんよりは勝るゝもおゝんりとゝ。かくても
厭ゝらばやとのみよ。雷神いふゝく怪をゝぐゝ。そのゝゝゝ〳〵くも向ぞ。縦
一碗の飯ゝあらばとも。一夜をあるさゝめぐを足りゝんと回答するふぞ。
婦点改もさゝらばとるゝさゝとゝいふ。雷神ゝ誘引つゝ入りとゝるゝ。れのさゝま
暴常ゝあゝるゝ。太古の穴居めたり。れの内より燈火るゝ

と昼のごゝく。あゝゝりたる処よりめぐりゝ臥ゝたるゝれが夫ぞ。
ゝ怪れよ。目今あゝゝの婦ぞ。夫の必死を救れる恩恵あれぞとゝるふ
ゝゝ点ゝれがゝの処ゝ雷獣の栖みめりとりふよゝゝゝ彼婦をゝれば。
れゝの内の明れもゝれが身の中ゝゝ光を發ゝぞゝゝる。怪〳〵ゝ限
ゝけゝゝど。恕ゝ脱ゝゝ。外ゝ宿ゝる れのゝけれぞんゝゝべゝゝゝ。
ゝれゝもゝゝゝゝ瞻ゝ居れば。婦ゝゝ笑ゝ。客侍ゝ長途ゝ疲労
ゝゝのゝゝゝ。蝸ゝ垂ねゝゝゝゝ蚊ゝゝゝの絶ゝゝ。ゝゝ睡ゝゝ
ゝゝゝゝ。棚ゝる木枕をゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝる蓁の細代屏風を建めば
ら〳〵。この処に身が臥居ゝ侍りゝ。ゝゝゝゝゝれば雷神ゝ底の侍ゝゝゝは
をゝゝゝゝゝゝ屏風の内ゝ臥ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ睡ゝゝ
ず。ゝゝゝの夜のあけよゝゝゝゝゝゝゝゝ夏の夜もゝゝゝゝゝゝ

比及になりつ。浩処に維とかちらしど。外面に来て。門の戸をおちくらに敲
れ。海神のかん使なり。翌の節句まで武佐越川小幡の間に朝雨
を沃とゞまりぬ。この三日が間ハこの本番なるによつてぞ籬なかるな。
と高ちよりいひちらし。内にも入らずゆりたり。雷神ハこれを守ておめ
去りしが此ふ龍神雷公を役の説實に故あり。節句なれバ降ちぐ
ともあるべし。旅路の雨ハいづれも直愛めぞと呟ハおどの婦枕言り
来て。客僧ハまづ睡をなしをやと問ふ。雷神答ていまだ睡もせ
ぬぞといふ婦のさゝやき。あるべきものをまるべきにあり。甲夜よりめのよ
紛せて。法号も問れざりし。汝ハ何と呼れるぞと向ふ
とれ雷神ハ屏風推遣て起出ていふやう。愚僧が法名ハ西啓綿
を雷魚と称するなり。そのさなりんといふ。にくさまやといふ婦合點せざ

ちかまうぶみなよかなれ名まなくあからさまや。今ハ何の悪行らんつかう夫なぞ
御まれ身小板よる。雷公よ行り志つるよ大木の裂目よ挾まれたる
られげく腕を折傷しかバ。翌の朝雨よ出ぐらじ。元来ハ男ハ落て
人を一怒し。物の戯ありな織なかなれバ。今のうち明白
よい哭えあげかじ。汝ハ雷神といはれなからをまうすれ。翌日へちが
夫よかゝりて。武佐小幡のほとりへ雨を降らしとなん是らしと
いふ。雷神ゆうて大よ怒れ。愚僧ハ久米の仙人よおとらぬものぞ
雲ニ乗りて雨を降するをようちんやたれともらせざるなきと
固辞しかバ。雷公の婦又いふやう。雲の上を飛行するつかう容易
らんとおぼされど。そのうれ術ありまけでく乗引なひね。
そのさ咲やるゆのぞ。雷神ハなびとゑみとそのへちひなかぐらかゝまでひあんた

雲絲門卷四
十一
中

推辭とをいなびぢめ〳〵繕ひうぐ。ゆは安う〳〵れ気をうれい。雷
公の婦慰めくりよ。ぢう。つぶ夫再生の恩を稟。翌又夫の役よりハ
ものへぶいうを。世の報ひをせざるべし。ちうれども。四身れ積悪の人は。
ちえうく積善ゆ。今より志を轉し。祈ひを改く。誠の道よ入を
ゆく。ちうら今一術を伝授し。ぢりゆん。その術をのく。衆生のためよ施
しゆぶ。久後恙ゆうるべし。ゆう自のためよく。恨ある人よ怨ちんと
計ゆぶ。身を亡ぼとお又その術よりあり。四身雷神とゆれたるものと。
今宵の因よ相稱て。名絵自性の理よとそと叮嚀よりひ諭し。
さて雲中を抵紛し。雨を降び。風を發し。又水脈をとゞむる術
を教るよぞ。雷神ハ數回よりて。その呪文を記ぢう。雷公の婦
又りのぢう。既よとの術をぢゆ。ぢうとも。淫酒よ懸念ぢうとれ。

術を破よ破ぢうし。只先非を悔く。德を積ゆくり。とぢ〳〵數列
し。一ハの壺とぢうり出し。一條の繻の繻ぢうもよられを雷神よ授てり
ぢう。四月朔の朝雲よ乗て。武佐小幡のほとりよ到らば。壺ゆる
水玉繻の繻よ浸しく。いく度もぢうぢうよ揮ゆく。ぢうれ初よ雨降
るゆり。水の竭ぢを期とし〳〵。この処へゆりゆ。ゆうぢうも勢ひよ
ゆし〳〵。踏み外しゆひそとしろをぢうそのぢうろを行ぢるよ。夏乃
夜くゆく明ゆんとん。折しもあと。一朱の雲。葺ぢとうく。門方小
起ぢ。雷公の婦指し〳〵。彼雲よ乗てゆく。時刻ハ今と
といそぐ〳〵ぢれば。雷神ハ壺を抱れ。繻をぢうく。内ぢと雲ぢ
無ぢれば。飄ぢとうく雲よ入る鳥のぢく。気よ裹ぢ。風よ吹の
ぢれ。ぢうく大よ刧げるぢと。

因よりあり一人甚驚。この段を俵書とる夕弔よ向て云。僧面
神が雷獸の家よ歌て。雷獸よ代て。雨降る物語ハ抵
神記以下の小説よ云へる。阿香のゆを化てうえたりとらんか
ゆてどらハあるよ理外の論よハあらべとハ。弔答て云。浮説詭
誕ハ小説者流の常論なり。たれども雷獸人を備て雨と
降るのこを。理外とて難ずるハいうよそや。世よ狐狸の人を
妖とするハ。人常よいの。狐狸と雷獸と。何の差別ハあらん。群書
纂要よ。雷公ハ猪の首よて。足あり。両の指ありとハ
て。雷獸雷鳥の圖說粗卷端よ載とハ。ゆほ盡さるを
のて。再びとて證とすべし。
信濃地名考よ云。藜科山よ栖鳥ハ。世よ圖とる鵲なり。画圖

小安しの差あり。戴冠ゑ。尾も長くさるのこ。雄のうち色む
よ似て。高二尺計。黒色よ白斑あり。鳥鷄の如し。冊項の肉あ
て。唯ある物の黄。雌鷄よ似て。腦のうち黒く白斑あり。當定よ
栖む。松の翠を啄とハり。○後鳥羽院御集考て山の云。この御製前
或ハこの山藜科夜羊よ鷄明あり。うどのハ。壺俵ゆるべし。一トとを
ゑる月の末よ登山をあらハ。一夜を明して。五十餘所を登
る。この日霧ありて。山よ人声絶ゆるなり。ゆの鳥六七ゑゑ。つく
つくゑゑよ。羽さゑ。九し。高く飛びさゑんゆをゑうて。数單東西
小立ゑれ。笠をゆぎて。杖をゆして追て。とどく。甚ゑ
こも声ゑ。ゑとび押て。終よ石中よ逃のり。さぐ。雛ハとる
雌雄石の間ゑ。ゆぶその話

鳥ぺよ[illegible]る[illegible]声を出さんず。鷄[illegible]妖[illegible]能あるべし。雛大サ[illegible]

[illegible]項[illegible]目上[illegible]より○又この山[illegible]科[illegible]より異獣あり。夏月雷

雨の起るとき[illegible]小獣石穂より[illegible]起る。雲より入るゆ冬蟲の

如し。須臾雨盆を傾ぐ如しとなり。あるとき暴雨の後、山う

[illegible]流出る。小獣二ッあり。大さ小犬の如くして、灰毛あり。

頭長く、ちらぢら羊[illegible]し。尾は狐の如く、あさ[illegible]より。利爪[illegible]

鷲の如し。[illegible]澤云。按ずるに。霹靂の地樹木より爪の痕あ

るものをあり。土佐の國海辺より夕立起らんとて。岩上より小

獣あり。鳥銃をもちて[illegible]。かゝりけるものを[illegible]

べし。近年六月十日。暴雨より。農夫[illegible]を逃[illegible]より電光一

發し。いなづち耳をとらんとせしに。二人の[illegible]落るものありさまなる

背より[illegible]。[illegible]腦[illegible]

[illegible]。[illegible]猛[illegible]

[illegible]。押[illegible]村人[illegible]

[illegible]。かの獣を大地より投つけ。

[illegible]の市の如し。この獣の狀[illegible]より

[illegible]。近江國[illegible]村[illegible]人の

[illegible]。明和七年閏七月伊奈郡駄科村

雷獣をいとう[illegible]左の如し

馬琴云。これら近世印行の書といへども。[illegible]実録[illegible]

人親しくこれをあつ。その怪を說ども怪しきもの。雷獣の説に類

ふものあり。予が管見[illegible]博士ありて。蛇足の辯をなすとも

あらんものをとゝろを[illegible]するのみ。[illegible]蘆遂小[illegible]

言をもりて。この卷のをはりより記せり。

雲妓間雨[illegible]月卷之[illegible]

中山堂